



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 4226 号 2018.2.22 発行

**結婚は認知症リスク下げる？ 81万人のデータを見ると** 朝日新聞 2018年2月22日  
結婚している人は、独身の人に比べると、認知症のリスクが低くなる可能性がある——。英国の研究者らが、日本など80万人以上のデータを調べ、こんな論文を医学誌に発表した。

ロンドン大学ユニバーシティカレッジの研究者らは日、中、米、仏、スウェーデンなど10カ国・地域の81万2047人分の医学調査データを解析。結婚、生涯独身、離婚や死別と、認知症の発症リスクとの関わりを調べた。

その結果、結婚している人に比べて、生涯独身の人のリスクは42%高かった。結婚後、パートナーと死別した人でも20%高かったという。研究者らは、結婚すると、より健康な生活を送ることなどが原因ではないかと推測している。

ただ、独身でも悲観しすぎる必要はなさそうだ。1927年より前に生まれた独身者のリスクは、40%高かったものの、それ以降に生まれた独身者では24%にとどまった。また、離婚した人の場合は、結婚した人とリスクの違いは見当たらなかったという。（小堀龍之）

### 貧困対策、人材育成で連携 大阪市と大阪教育大

大阪市と大阪教育大は21日、教育や貧困対策、来を応援する」ための包括連携協定を結んだ。教育の現場を有する大阪市と高度な教育研究機関である大阪教育大の連携で、子どもの貧困対策などを含めた大阪の教育力の向上を図る。

協定書を手にする吉村市長（左）と栗林学長＝21日、大阪市役所

協定に基づいて2018年度から、市教育委員会と大阪教育大が連携し、「大阪市教員養成協働研究講座」を設置する。

現場経験がある元校長らを特任教員として大学が雇用し、専任の大学教員とともに、市教委と連携して研修プログラムを開発する。市内の教育現場を大学院生に学校実習の現場として提供し、即戦力となる人材を養成する。

市役所で開かれた調印式で、吉村洋文市長は「貧困の連鎖を断ち切るには教育が重要。学生にも子ども食堂など、教育の実践を積める場に参画してほしい。経験を積んだ学生が市の教員になれるよう試験制度を見直したい」と制度改革の考え方にも言及した。

栗林澄夫大阪教育大学長は「子どもたちに寄り添って解決できる人材の育成が必要。学校現場に役立つ研究を、具体的にしていける人材を育成していけたら」と意気込んだ。

大阪日日新聞 2018年2月22日  
人材育成などで協力して「子どもの未



## 新興企業の倒産件数8年ぶり増 老人福祉・介護など経営計画の甘さ目立つ

産経新聞 2018年2月21日

平成29年に倒産した企業のうち、業歴10年未満の新興企業の件数が前年比6・9%増の1793件となり、8年ぶりの増加だったことが21日、東京商工リサーチの調査で分かった。比較的参入しやすい飲食業や高齢化をあてにした老人福祉・介護業などで業歴の浅い企業の倒産が増えた。好景気で全体の倒産件数が9年連続で減少する中、新興企業の苦境が目立つ。

新興企業が倒産件数全体に占める割合は24・5%で前年比2・1ポイント増。3年ぶりに前年を上回った。逆に業歴30年以上の老舗企業の割合は2年連続で減少し、31・2%となった。倒産企業の平均寿命は23・5年と前年より0・6年減った。

東京商工リサーチの担当者は、老舗に比べ資金力が乏しい新興企業が人件費高騰で人手を集められず苦境に陥ったと分析。「ビジネスモデルが甘い経営者も少なくない」としている。

## 子ども支援の団体に助成金 大和証券福祉財団

佐賀新聞 2018年2月22日



贈呈書を受け取るおもちゃ図書館「おとぎのくに」よか！  
くらぶの川本美津子代表＝佐賀市の大和証券佐賀支店

全国のボランティア団体を支援している大和証券福祉財団は20日、障害がある子どもらにおもちゃの貸し出しや遊び場を提供している伊万里市の「おもちゃ図書館『おとぎのくに』よか！くらぶ」（川本美津子代表）に助成金11万1千円を贈呈した。

佐賀市の大和証券佐賀支店であった贈呈式で、堀内奈穂子支店長が川本代表に贈呈書を手渡した。同団体は月2回、伊万里市民センターなどで活動しており、クリスマス会やもちつき大会など

のイベントも開いている。助成金は体験学習の運営資金に充てる。川本代表は「近年は自然災害が多いため、地震の揺れを体験できる福岡県の防災センターに出かけたい」と感謝した。

同財団は1994年度からボランティア団体の支援を始め、本年度は177団体に総額約4500万円を助成した。県内は今回を含めてこれまでに35団体が総額約850万円の助成を受けた。

## 同意のない手術1万6475件…強制不妊、救済の動き 読売新聞 2018年2月22日

自民、公明両党の幹事長、国会対策委員長は21日、東京都内のホテルで会談し、旧優生保護法に基づき知的障害者らが不妊手術を強制された問題について、議員立法も含めた救済措置を検討する方針で一致した。

会談では、公明党の井上幹事長が「与党として何らかの形で救済すべきだ」と訴え、自民党の二階幹事長は「その通りだ」と応じた。

自民党の森山裕国対委員長は会談後、記者団に、「救済は極めて大事な問題との認識で一致した」と語った。

そのうえで、「法案化するなら議員立法になるだろう。野党も含めた対応が必要になってくる」と述べ、野党にも協力を呼びかける考えを示した。まず自民、公明両党の政務調査会で問題の経緯などについて調べた後、与党内にプロジェクトチームを作り、救済に向けた法案を議員立法で作成する方針。立憲民主党や社民党など野党内でも、救済に向けた超

党派の議員連盟設立の動きがある。

## 優生保護法下で…女性7割、北海道が最多

この問題を巡っては、国に損害賠償を求める訴訟や自治体による資料の開示の動きが広がっている。

◆強制不妊手術の件数

北海道	2593	石川	88	岡山	845
青森	206	福井	37	広島	327
岩手	284	山梨	55	山口	181
宮城	1406	長野	387	徳島	391
秋田	97	岐阜	347	香川	180
山形	445	静岡	530	愛媛	155
福島	378	愛知	227	高知	179
茨城	54	三重	110	福岡	344
栃木	254	滋賀	282	佐賀	86
群馬	21	京都	95	長崎	51
埼玉	405	大阪	610	熊本	204
千葉	174	兵庫	294	大分	663
東京	483	奈良	20	宮崎	229
神奈川	420	和歌山	103	鹿児島	178
新潟	267	鳥取	11	沖縄	2
富山	118	島根	123	都道府県別が不明	1536
<b>計</b>		<b>1万6475</b>			

1949～96年。厚生労働省の資料を基に作成

宮城県内の60歳代の女性は今年1月、全国で初めて国に1100万円の損害賠償を求め、仙台地裁に提訴した。今月19日には、村井嘉浩知事が手術の公的記録がない仙台市の70歳代の女性について、「いくつかの論拠を示せば、裁判で手術を受けたことは認める」と明言。これを受け、この女性も同地裁への提訴を決めた。

このほか、東京都と札幌市の70歳代の男性2人がそれぞれ、東京、札幌両地裁に提訴を検討している。

また、北海道も19日、資料が保存されていた1210人分の性別や年代、疾患の内訳などを公表。9割超の1129人が道の審査会で手術が適

当と判断されたことなどを明らかにした。

厚生労働省によると、旧優生保護法の下で行われた、本人の同意のない手術は少なくとも1万6475件あり、このうち女性が7割を占めた。都道府県別では北海道（2593件）が最も多く、以下、宮城（1406件）などが続いた。

同省幹部は「与野党から求められれば、都道府県の資料の保管状況などについて調査することも検討せざるをえない」としている。

## 強制不妊手術 北海道の男性も提訴へ 全国3人目 毎日新聞 2018年2月22日

旧優生保護法（1948～96年）に基づく障害者らへの強制不妊手術を巡り、北海道の道央地方に住む70代の男性が国に損害賠償を求め、札幌地裁に提訴する意向を固めたことが関係者への取材でわかった。代理人となる弁護士によると、他に数人の男女から提訴の相談を受けており、集団提訴も視野に入れている。男性は、1月末に仙台地裁に国賠訴訟を起こした60代女性や、同地裁に提訴する意向を固めた70代女性に続く3人目の原告となり、道内では初めて。

関係者によると、男性は20歳前後の時に精神科を受診した後、不妊手術を受けた。男性は「拒否できるような状況ではなかった」と話しているという。今後、手術の諾否を決めた道優生保護審査会や手術の関係書類を集める。

一方、宮城県内では、手術記録の台帳などが残っていなかったことから提訴をあきらめていた70代女性が、同県の救済方針を受けて仙台地裁に提訴する意向を固めている。北海道の70代男性の手術記録が確認されなかった場合、道の対応に注目が集まる。

旧厚生省の衛生年報などによると、記録が残る49年以降の全国の強制不妊手術1万6475件のうち北海道は2593件と全国最多だった。道は今月19日、62～73年度に審査された1210人分の資料があったと発表。うち手術を認めたのが1129人、認めなかったのは2人だけで、手術を認めた最年少は11歳の少女だった。【日下部元美】



いつまでも食の楽しみを 日本一の嚥下食 カンテレ 報道ランナー 2018年2月19日  
認知症や、高齢の方も多く入居する神戸市のとある老人ホーム。

そこでは、寝たきりのおばあちゃんも...この笑顔！と少し不機嫌なおばあちゃんも...

「(指でOK!)」

みんなが笑顔になる理由。

それは、日本一のフレンチのシェフが作る一杯のスープに隠されています。

兵庫県芦屋市にあるフレンチレストラン「メゾン・ド・タカ芦屋」。

料理長・高山英紀シェフは2015年に、世界各国が参加するフランス料理のオリンピック、「ボキューズドール」に日本代表として出場し世界第5位に。

去年もコンクールで日本一に輝きました。

そんな日本を代表するシェフが4年ほど前から取り組んでいるのが...

【高山英紀シェフ】「こちら、カリフラワーのスープになります」

食欲が落ちたり、食べ物を上手く飲み込めない「誤嚥」の危険があったりする、高齢者に向けた「嚥下食」の開発です。

【兵庫医科大 道免和久主任教授】「おいしい」

【高山英紀シェフ】「レストランでもお出しできるような、スープというか。料理になると思うので。ちょっと甲殻類を何かを焼いて乗せるとおいしい」

兵庫医大の専門家と共同で研究を進め、10種類以上が提供できるようになりました。

【高山英紀シェフ】

(Q. 嚥下食開発のきっかけは?)

「私は実は父親を64歳で肺がんでなくしてるんですけど、抗がん剤の治療をやるにしても、口から入れないと数値が上がっていかない。治療もできないというのがありまして、そこで食べる大切さを見てですね。父親を最後まで、自分の手料理で色々やったんですけど、そういうのを見ると家族もすごい喜んでもらって...。こういう嚥下食、嚥下スープを一生懸命やってる」

シェフの作る嚥下スープは、共に開発する専門家から見て何が優れているのでしょうか?

【道免教授】

(Q. これまでの嚥下食との違いは?)

「美味しさです。(フレンチの) いろんな技法を使うことによって、とろみを自



然に出せるということ」

人は通常、息をすると空気が気管に入り、食べ物を食べたときは気道が閉じて、食道に流れ込みます。

しかし加齢や病気などにより、飲み込む力が弱くなると、

誤って食べ物が気管から肺の中に入り(=誤嚥)そこで炎症を起こしてしまうのです。

(Q. 誤嚥すると何が危険?)

「一番危険なのは、誤嚥性肺炎ですね。日

本人の死因の第三位が肺炎です。その肺炎のうちの30%くらいは、誤嚥性肺炎といわれています」

とろみ剤などで、食べ物の水分にとろみをつけることにより、誤嚥の危険性を抑えることもできますが、味や見た目が悪くなり、嫌がるお年寄りも多いといわれています。

神戸市垂水区の老人ホームで暮らす増田朋子さん（90）。



ここ最近、普通のご飯を食べることが難しくなり、食事量が激減。

長女の由美子さんも心配しています。

【管理栄養士】「お待たせしました。きょうは炊き込みご飯です」

【増田さん】「見たらおいしそうやけど、食べたくない。食べられない」

【長女・由美子さん】「あと一口だけ...もういらん？」

【増田さん】「うん...せっかくやけど」

結局この日のお昼ご飯は、ほとんどなにも食べませんでした。

【長女・由美子さん】

(Q. 食べてくれないと不安なところもある?)

「そうですね。食べることで栄養とか取ってほしいなと思うんですけど」

(Q. 家で食事量が落ちたときは?)

「まぜもんとか、どろどろにしてもやっぱり味っていうのがね...合わないのか。何もできないしどうしよう。家族としては焦りみたいなの。一口でいいから食べて飲んでみたい状態になるので」

この施設では高山シェフの嚥下スープが、希望した人に提供されていて、増田さんも、一般の食事からの切り替えを試していくことになりました。

この日はレストランの厨房でカリフラワーのスープと、開発中の和食「肉豆腐」を試作。

【高山英紀シェフ】「玉ねぎをすごい香ばしく焼くと、こういう1個1個の作業がすごく大切で、この香りがスープに移動するという感じ」

前回の試作では、豆腐の水分がにじみ出てしまい失敗。

今回は水と食材が分離しないように、里芋を入れることにしました。

「ちょっと分離してるんです。

これとろみ剤を入れたらつながるんですけど、それやっちゃダメなんですよ。水分が誤嚥しやすい」

「里芋多めに入れて回したんですけど、これだと分離しない。きれいにつながりました。これだったらたぶん誤嚥しないですね」

高山シェフの嚥下スープは、とろみ剤や添加物、保存料を一切使わず、自然の食材だけで、誤嚥しにくいとろみをつけています。

そして、肉豆腐のスープが完成した後も...

「寝てる風なんですけど」

ベッドで寝たきりの人が食べることを想定しながら、何度も味見をして、濃度を調節したりと試行錯誤は終わりません。

1月末、高山シェフは嚥下スープを提供している老人ホームに足を運びました。

まず部屋を訪問したのは、91歳のおばあちゃん。

【高山英紀シェフ】「きょうはわたくしがお持ちしました。久しぶりにお会いできてうれしいです。お元気そうで。きょうはコーンスープをご用意しました」



【毛利和子さん（91）】「まあこんなもんでしょ！」

【高山英紀シェフ】「これお褒め頂いたと  
いうことで笑」

実はこのおばあちゃんは、半年以上シェフ  
のスープしか、ほぼ口にしていないんです。

【高山英紀シェフ】「カリフラワーのスー  
プをご用意しております」

次に訪れたのは、普通のご飯がほとんど食  
べられなくなり、シェフの嚙下スープへの  
切り替えが決まった、あの増田朋子さんの  
部屋。

【増田さん】「(スープ飲んで) 本当にお上手じゃなくておいしい。ほんとよ。嘘や思わな  
いでね」

とは言うものの、その後、次の一口が進み  
ません。

いったん部屋から出て管理栄養士に話を  
聞いていた時でした。

管理栄養士「一口のおにぎり...あ。」

記者「今まさに食べましたね」

管理栄養士「そうですね...びっくりしまし  
た」

その後も少しずつですが、時間をかけて...  
管理栄養士「美味しいんだと思います。す  
ごい...」

【高山秀紀シェフ】「一口召し上がってお  
いしいと、自然と手がいってその中で笑顔  
になる。あの瞬間がまさに、活力というか  
幸せを感じる」

「お薬で生かされてるわけではなくて、ち  
ゃんとした食事で生かされてるっていう  
食事を提案できたら、一番いいんじゃない  
か。(食べて) よかったと思ってもらえる



瞬間を作れば、最高だと思いますけどね」

## NPOの思い伝え20年超 仙台の情報誌「杜の伝言板ゆるる」3月号で発行終了へ

河北新報 2018年2月22日

宮城県内の市民活動を紹介する無料情報誌「杜の伝言板ゆるる」が3月号で発行を終え、  
創刊から20年を超す歴史に終止符を打つ。県内におけるNPO活動の草創期から情報発  
信の支援を続けてきたが、メディア環境が大きく変化し、慢性的な資金難もあって決断し  
た。4月からはNPOのイベント案内などに絞り込んだ情報誌に生まれ変わる。

ゆるるは1997年6月、仙台市内の福祉関係者らが創刊した。特定非営利活動促進法  
(NPO法)が施行されたのは98年12月。市民活動を取り巻く環境が変わる中、NP  
Oへの理解を広げようと、同名の認定NPO法人「杜の伝言板ゆるる」(仙台市)が毎月休  
まず発行し、最終の3月号で通算250号となる。

大久保朝江(ともえ)編集長(69)は「地道ながらも、地域に役立つ活動に光を当て  
てきた」と振り返る。A4判16ページを基本に最近では毎月9000部を発行。NPO関  
係者の寄稿が目玉で、現場の思いを読者に伝え続けた。



### 3月号発行に向け、打ち合わせる大久保編集長（右）ら



インターネットの普及で情報発信の手法が多様化し、数年前から活動の見直しを検討してきた。長年の資金不足も決断を促した。ゆるる発行事業は2016年度決算で約200万円の赤字を計上した。大久保編集長は「何とかやりくりしてきたが、息切れしてきた」と明かす。新たな無料情報誌は「みやぎNPO・市民活動情報 ゆるる i n f o (インフォ)」。NPOのイベントやボランティア募集、助成金情報などを掲載する。A4判8ページ。毎月1日、6000部を発行する計画だ。

大久保編集長は「市民活動への理解は着実に進んでいるが、まだまだ。成熟した市民が一人でも増えれば、地域や社会は変わっていく。情報発信を基軸に、支援できるまで続ける」と思いを新たにしている。ゆるる3月号は1日発行。仙台市内の公共施設などで配布する。

### 訪問支援員 保育所や学校で「なじむこつ」指導 障害児に集団生活を 体制づくり 福岡市は道半ば

西日本新聞 2018年02月22日  
笑顔を見せる財津環ちゃん。保育所で訪問支援を受けて集団生活になじむなど、成長を続けている



療育施設のスタッフが保育所や幼稚園、学校に出向き、知的に遅れがある子どもなどに直接、集団生活を送るための訓練や、職員に対する支援指導を行う「保育所等訪問支援」。児童福祉法に基づき、障害児も地域の子どもと一緒に遊び、学ぶ機会を促す一助となる制度の一つだが、福岡市では利用が進んでいない。療育を受ける子どもが増え、療育施設側で対応する専任職の確保が難しいことなどから、体制が後手に回っているのが実情のようだ。

同市南区の認可保育所に通うダウン症の財津環（たまき）ちゃん（5）。昨年6月から月に2回、この制度で療育施設から来る「訪問支援員」にも見守られている。

#### ●保育士にも学び

身支度したり、グッズを作ったりする時、保育士なら「つい手助けしてしまう」場面でも、支援員は環ちゃんが自分で行動するまで、じっと待つ。するとー。準備を一人でできるようになっただけでなく、寒さで手がかじかんだ時には自ら「手伝ってください」と周りに言えるようになった。

音楽遊びでは、支援員が床に安全マットを敷いて「ここが子どもの場所」と教え、今では落ち着いて立っている。

日に日に集団行動になじむ娘の姿に「すごく成長している」と目を細める母の真弓さん（45）。ここの保育所はもともと、障害児を何人も受け入れているが、驚いたのは、保育士たちから「言葉掛けや関わり方がすごく勉強になった」と目を輝かせて言われたこと。「同じ目線で娘の今後の課題や必要な支援を共有し、考えられるようになった」のがうれしい。

#### ●通所の子が急増

保育所等訪問支援制度は2012年度に始まった。未就学児が療育施設に通う児童発達支援や、放課後等デイサービスと同様、障害児向けサービスの一つだ。

訪問支援の指定を受けた事業所は、保護者から依頼があれば、保育士や児童指導員、作業療法士など障害児の指導経験や専門知識がある訪問支援員を、保育所や学校に派遣する。月2回を目安に、1回1500円程度の自己負担（1割）で利用可能。ただしサービスの利用は、実施主体となる市町村の裁量で決まる。

真弓さんが制度を知ったのは16年。5歳から園外活動として始まる水泳教室への参加

を「集団行動が難しい」との理由で断られたのがきっかけだ。活動を見守ってくれる人を探した際、今も通う福岡県小郡市の療育施設のついで、訪問支援を手掛ける同県春日市の事業所の紹介を受けた。

福岡市は当時、こうしたスタッフが所属する市内の療育施設で「提供体制が整わなかった」(担当課)として、支援を受けるのに必要な受給者証の交付を16年度から始めたばかりだった。市内では療育施設に通う未就学児が年々増え続け、同年度末に月800人(3月末時点)を突破。通所での受け入れさえ制限し、待機児童がいたことも、遅れた一因とみられる。

指定を受けた事業所でも専任の訪問支援員を配置せず、通所のスタッフが無理に時間をつくって対応するケースも。月2回の訪問は困難で、市は“独自ルール”として利用を年3回に限り、積極的な周知も見合わせていたという。

### ●幼少時に慣れを

市は04年度以降、市立の療育センター3カ所に委託する形で、保育所や私立幼稚園に対し、園側からの要請に応じてスタッフが訪れ、職員に助言や研修を行う独自事業などを先行して実施。ただ障害児本人への支援はなく、要請した1園につき年に1~2回の利用にとどまり、今後は「保育所等訪問支援のニーズにも対応できるよう、支援員を置く民間事業所の拡充も促していく」(担当課)方針だ。

市内の指定事業所は現在、計13施設。事業所によっては利用回数の制限や居住区に対応できないなど、体制づくりはなお道半ば。療育施設に通う子の親などでつくる会「インクルーシブふくおか」の上角智希さん(45)は「いずれ社会に出る子どもには集団への慣れが必要。周りの子ども、幼少時に障害児とともに過ごした体験が多いほど、社会全体の理解者が増える」と指摘し、制度利用の広がり期待を寄せる。

## 万博応援ソング披露 ET-KING「この街の空」 大阪日日新聞 2018年2月22日

万博誘致に向けて協力する松井知事(左から4人目)と「ET-KING」のメンバーら=21日、大阪府公館



大阪を拠点に活動するヒップホップグループ「ET-KING」が21日、2025年の国際博覧会(万博)の大阪誘致に向けた機運を盛り上げようと、応援ソング『この街の空』を制作し、府公館で松井一郎知事に披露した。今年1月に病気で亡くなったメンバーへの思いを胸に、「悲しい別れもあったがこの街に愛を届けたい」と語った。

応援ソングは「大阪に恩返しをしたい」と、ET-KINGが府に呼び掛けて実現。今年初めから1カ月ほどかけて完成させた。制作中の1月には、リーダーのいときんさん(本名・山田祥正さん)が38歳で亡くなった。メンバーは「彼を失った悲しみの中で楽曲を作ることは、精神的にこたえた」が、気持ちを奮い立たせて完成させた。

曲には万博誘致を願う人たちの熱意を込め、歌詞には「前に前に信じていこう 夢の先で君と笑えるように」など、前向きな言葉がちりばめられている。

会場ではET-KINGと府とで包括連携協定が締結され、コシバKENさん(37)は「リーダーのいときんが天国に旅立ったり、いろいろあったが、万博を迎えられるように頑張りたい」と意気込んだ。松井知事は「(歌詞を)読んでいて泣きそうになる。日本中の人にこの歌を覚えてほしい」と話した。



月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も  
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行